

知られざる言語学者・菊池慧一郎—日本言語学史外伝(1)

長田俊樹

1. はじめに

菊池慧一郎は昭和の初めには世に知られた哲学者だった。しかし、亡くなって76年が経過した現在、菊池慧一郎の名はほとんど忘れ去られている。

筆者が知られざる言語学者・菊池慧一郎に興味を持ったのは、父長田夏樹が終生尊敬していた師であったからである。愛知県立大学のサイトに掲載されている「長田夏樹年譜」¹(以下年譜と略称)をみると、1940年12月のところに、以下の記述がある。少し長くなるが、引用しておく。

大日本回教協会主催の「アラビヤ語講習会」を神田駿河台にあった佐藤新興生活館で受講する。17日に地下食堂で行われた懇親会に出席して、講師の菊池慧一郎先生と親しくなる。菊池先生に誘われて、田端にあるご自宅をたびたび訪問するようになる。菊池先生は京大でギリシア哲学を講じておられたこともあり、プラトンがご専門であった。語学マニアで、生活館ではアラビア語のほかサンスクリットも教えておられた。お聞きすると、英語・独語・仏語・ギリシア・ラテン・イタリア・スペイン・サンスクリット・アラビア・ペルシア・マレー・シリア・ヒンドスタニー・ウルドゥー・ヘブライ・ジャバ・蒙古・西藏・満州・ビルマ・タイ・ロシア語に通じておられるということだった。折々のお話で、それが事実であることを知る。

なぜここまで詳細な年譜が可能なのか。

それは長田夏樹にコレクター癖があり、いろんな資料を残していたからである。遺品の中に、「菊池慧一郎先生関係書類」(以下菊池書類と略す)と赤字で書かれた封筒があり、その中には大日本回教協会からの一通のハガキが残されていた。ここに紹介する。

謹啓時下愈御清適之段奉大賀候

陳者アラビヤ語講習会懇親会左記の通相催度候間萬障御繰合の上御出席被下度此段御通知申上候
尚諾否は十六日(月曜日)の講習当日相纏め度候。若し十六日欠席の方は折返御回示相煩度願上候

記

一、日時 十二月十七日(火)午後五時

一、場所 佐藤新興生活館地下食堂

一、会費 五十銭持参

ここにある佐藤新興生活館は、現在の山の上ホテルである。東京はずいぶんと空襲で焼け野原になっ

¹ 『長田夏樹著述集(下)』に掲載された長田礼子編「長田夏樹年譜」が、以下のサイトにアップされている。<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/pdf9/nenpu.pdf>

たが、この建物は現在まで残っている。1937年に建てられたので、1940年当時、新築に近かった。名前は質素だが、実際には豪華な建物なのである。なお、このアラビア講習会で習ったアラビア語が Zirni Text²の解説に非常に役に立ったと夏樹自身が述懐している。

菊池書類の中には、菊池が通じていた言語が記された手書きのメモがある。

そのメモは神奈川師範学校と印刷された原稿用紙に記されている。年譜を参照すると、神奈川師範学校に勤務し始めた1947年5月26日以降、1948年4月神戸外事専門学校（後の神戸市外国語大学）に赴任するまでに書かれたものと思われる。そのメモによると、上にあげられた言語と若干の違いがある。スペインには横棒で消された跡があり、トルコが抜けている。他のロマンス諸語である仏語やイタリア語ができて、スペイン語ができないというのは不思議な気がするが、なぜスペイン語が除かれたのかは今となってはわからない。

遺品を整理していると、これだけ残しておいた資料があるのだから、それを活用しなさいという父の声が聞こえてきそうである。そこで小論をまとめる次第である。

2. 菊池慧一郎の生涯と彼の著作

菊池慧一郎とネットで検索しても、ウィキペディアに掲載がないし、コトバンクにも記載がない。一方、菊池慧一郎の父、菊池惺堂は南画のコレクターとして有名なのだが、まず菊池惺堂についてみておこう。

菊池晋二、号惺堂について、まとまった記述がインターネットサイトにある³。そのサイトには、「財界物故傑物伝」実業之世界社 昭和16（1941）年刊を引用して、以下のように述べている。

晋二は慶應三年七月生、養父の没後家督を相続して長四郎を襲名した。呉服商を営むと共に、実業界に入り、東海銀行取締役の外、凸版印刷、日本共立火災、東京三興会社各取締役、下野電気鉄道監査役に任じ、また日本橋区会議長に挙げられ、父子二代区政に貢献した。漢籍の素養深く、詩文に長じ書画彫刻の技に堪能で、骨董に趣味深かったが、昭和十年二月十五日脳溢血を以て逝去した。享年六十九。

先代長四郎の長男慧一郎氏は明治二十八年三月生、慶應義塾文学部の出身で、浅草女子商業学校に教鞭を執ったが、現在は病気のため辞し、静養中である。

ここに、菊池慧一郎のことが記されている。1941年時点では、病気静養中であつたことがわかるが、京都大学で教えていたことへの言及はない。『菊池惺堂日記』の翻刻をおこなった下田章平による一連の論文⁴を使って、もう少し菊池慧一郎の生涯をみておこう。

菊池慧一郎は明治28（1895）年に生まれ、昭和20（1945）年に亡くなっている。菊池惺堂の後裔か

² 岩村忍の名前で、京大から出版されている（Iwamura 1961）。アフガニスタンで話されていたモンゴル語がアラビア文字で書かれている文書を山崎忠と長田夏樹が解説している。そのときの調査については梅棹忠夫(1956)『モゴール族探検記』（岩波新書）が詳しい。

³ http://home.f07.itcom.net/rainbow/sanoya_rekisi.html(2021年1月25日アクセス)

⁴ 下田章平は『菊池惺堂日記』を翻刻して出版しているが(下田 2018, 2019a, b,c)、その中にも慧一郎のことが「慧」として登場する。京都で会ったことや東京に来たことだけが綴られていて、あまり慧一郎の生涯に関する新しい事実は発見できなかった。

ら直接お話をうかがい、資料提供を受けた下田章平によると、その経歴はこう記されている。

慶応義塾大学文学部卒業後、京都帝国大学・九州帝国大学・龍谷大学で講師を努めた。著書の奥付から少なくとも大正末年までは京都に滞在していたと見られる。後に東京に戻り、浅草女子商業学校長となるが、昭和一一年以前に病気静養のために辞している。下田(2015:37)

下田による菊池慧一郎の経歴について、上の「財界物故傑物伝」とくらべても決して多くはない。下田の研究対象が菊池惺堂である以上、いたし方ない。直接、菊池家の後裔からお話をうかがっているのなら、もう少し詳しくてもいいのではないか。

長田夏樹が菊池慧一郎からアラビア語を習ったのは昭和 15 (1940) 年なので、浅草商業学校長を辞した後に、習ったことになる。病気静養とあるので、昭和 11(1936)年にはすでに病気を患っていたことがあきらかにされているが、何の病気なのかは記載がない。また、この下田(2015)には『長田夏樹先生追悼集』に掲載された年譜からの引用(小論の冒頭で述べた箇所)から、「二十二か国語に通じた「語学マニア」であったという」と指摘している。残念ながら、下田の論考からは年譜以上に詳細な記述はほとんどみられない。

『京都帝国大学文学部三十周年史』を引くと、京大の在籍期間がもつとはっきりする。

それによると、大正 13(1924)年 6 月から昭和 6(1931)年 3 月まで、京大講師として、ギリシア語を教えていた。29 才から 7 年間、京大で教鞭をとっていたことになる。長田夏樹から聞いた話によると、京大で教えるようになった理由は、当時京大で教えていた田中秀央がヨーロッパへ留学していたので、その代わりにギリシア語を教えるためだという。後で述べるように、京大在職中の菊池については様々な証言がある。

九州大学の在籍期間については、『九州帝国大学一覧』が国会図書館デジタルコレクションでみることができる。それによると、「昭和二年」の法文学部講師の欄に菊池慧一郎の名前がある。担当科目は哲学である。続く「昭和三年」も哲学を教えているが、「昭和四年」には講師の欄に菊池慧一郎は見当たらない。「昭和五年、昭和六年」には講師として再び名前が挙がっているが、担当科目が希臘語及羅匈語になっている。つまり、京大在籍中に、九大にも教えに行っていたことがわかる。ただし、昭和 6(1931)年 3 月には京大を辞めているので、昭和 6 年 4 月からは九大だけに勤務していたことになる。

なお、日本の哲学教育史をまとめた柴田(2001:164)によると、九大の哲学教育について、「古代哲学史は第三講座にいた鹿子木と講師の菊池慧一郎が担当」とある。ただし、『九州帝国大学一覧』をみるかぎり担当はあくまでも「哲学」であった。実際にはプラトンを専門とする菊池なので、古代哲学史を教えていたとしても不思議ではない。九大の哲学第三講座教授であった鹿子木員信は菊池の慶応時代の恩師であることから、鹿子木と呼ばれて講師に就いたものと思われる。

一方、浅草女子商業学校を手がかりに、国会図書館デジタルコレクションの官報をみると、この学校は昭和 3(1928)年に開設されている。菊池が関わるようになったと思われる出来事が、以下の官報より明らかになる。

官報 1933 年 2 月 20 日
文部省告示第四十九号

東京府東京市浅草区松葉町ニ設置セル浅草女子商業学校ノ設立者ヲ菊池長四郎外一名ニ変更ノ件昭和八年二月二十七日認可セリ

つまり、1931年に京大を辞め、九大の勤務も退いた後、東京に戻り、この浅草女子商業学校を買い取って、父・長四郎（晋二は菊池家の代々の名跡である長四郎を継いだ）が設立者となると共に、学校長に就任したと推測できる。しかし、いつ学校長を辞めたのかは明らかではない。小論では、菊池の生涯をできるだけ詳しく述べたい。

では、菊池慧一郎の著作について、みておこう。

著書にはプラトンの訳著『パイドン』（岩波書店、一九二四）、『プロタゴラス』（同前、一九二五、岩波文庫版（一九二七）に再録）、九州大学文学部での講義案を一書にした『ラテン語初歩』（刀工書院、一九三〇）などがある。（下田 2015:37）

また、下田は別の個所で『オリジナリティー』（古今書院、一九四〇、頁数無記載）をあげている。つまり、この『オリジナリティー』を含めた4冊の書籍を刊行している。

それ以外の業績をみておこう。国会図書館サーチによると、以下があげられている。

菊池慧一郎（1931）「古典文献学史」プラトンアリストテレス学会 編『ギリシア=ラテン講座』第1部。鉄塔書院。

菊池慧一郎(1931)「宗教的目的論と其止揚」朝永三十郎 [著],天野貞祐 編『朝永博士還暦記念哲学論文集』岩波書店。893-940 頁。

「瀟湘臥遊圖 東京 菊池慧一郎氏」文部省篇(1938)『日本国宝全集』第81輯

最後の「瀟湘臥遊圖」は菊池慧一郎が所有していたと思われることから、菊池惺堂のコレクションを引き継いでいたことがわかる。現在、東京国立博物館が所有していて、東博のサイト⁵に、以下のような解説がある。

北宋末の文人李公麟の作として伝世した宋代水墨山水画の名品。清の乾隆帝が愛蔵した四名巻の一つであった。筆者は南宋の乾道 6, 7 年(1170, 71)の章深などの跋文より李公麟ではなく、同郷の舒城の李という画家であることがわかる。景勝の地として名高い瀟湘の山川をきわめて微妙な水墨の濃淡により大観的に見事に描いている。菊池惺堂旧蔵品。

この国会図書館サーチに漏れているものがある。あとで詳述する『回教世界』に掲載された著述⁶と

⁵ https://www.tnm.jp/modules/r_collection/index.php?controller=dtl&colid=TA161&lang=ja(2021 年 1 月 30 日アクセス)

⁶ 『平成 15 年度～平成 16 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) 成果報告書：戦中期日本におけるイスラーム研究の成果と評価—早稲田大学「イスラーム文庫」の分析』（研究代表者店田廣文。2005 年。以下便宜上、店田 2005 と表記）に『回教世界』の目録が掲載されている。

『哲学研究』に掲載された論文⁷である。

菊池慧一郎(1922)「メノン研究」『哲学研究』7(8)

菊池慧一郎(1926)「プラトン徳論私断」『哲学研究』11(12);

菊池慧一郎(1927)「プラトン徳論私断」『哲学研究』12(1),12(3)

菊池慧一郎(1940)「韋駄天アラビア語」『回教世界』2(4), 2(6), 2(7), 2(8), 3(1)

菊池慧一郎(1940)「コーラン原文解説」『回教世界』2(10)

菊池慧一郎(1941)「千一夜解説講評」⁸『回教世界』3(2), 3(4)

『回教世界』のコピーを取り寄せると⁹、店田(2005)の情報で漏れているものがある。『回教世界』2(5)には「韋駄天アラビア語」が掲載されていないことになっているが、実際には掲載されている。その理由は目次に菊池慧一郎の名前がなく、「韋駄天アラビア語」とのみ掲載されているからであろう。また、『回教世界』2(12)が「韋駄天アラビア語」の最終回であるが、店田(2005)には掲載されていない。なお、『回教世界』3(1)は目次では菊池慧一郎「韋駄天アラビア語」となっているが、実際には「ヘブライ語突破」が掲載されている。ヘブライ語の講習会も行われたのかもしれない。

以上、現在わかっている菊池慧一郎の全著作である。ただし、『オリジナリティー』には、これ以外の論文もあるが、それは後述する。

3. 菊池慧一郎の評判

菊池慧一郎は1924年から7年間、京都帝国大学でギリシア語を教えていた。その当時の菊池について、いくつかの証言がある。実際に、菊池からギリシャ語を受講した人々が後に菊池のことを回想している。

まず、文化勲章を受章した田中美知太郎はこう述べている。

わたしが京大へ入ったときのギリシア語の先生は、菊池慧一郎といて、さつぱり聞いたことのない先生であつた。古典語の正規の先生としては、田中秀央さんが助教授として教へてをられたわけであるが、その時はちやうどイギリス留学中だつたのではないかと思ふ。そして菊池さんが非常勤講師として新しくギリシア語教へることになつたわけだ。先生はまだ二十七、八歳の若さで、色が白くて、どちらかと言ふとにやけた感じであつた。ところが口から出る言葉は、大へん乱暴な江戸弁であつた。(田中 1984:163)

すでに述べたように『京都帝国大学文学部三十年史』によると、菊池が京大に講師として採用されたのは大正13(1924)年6月であり、菊池は29歳であつた。田中秀央の留学中の授業の穴を埋めるために

⁷ 以下のサイトから、『哲学研究』の目録をダウンロードすることができる。

<http://www.nihontetsugaku-philosophie-japonaise.jp/tetsugaku-kenkyu/>(2021年1月25日アクセス)

⁸ 目次では菊池慧一郎の名前があげられているが、実際には石田毅文がおこなった講読の講評を菊池がやっているだけである。

⁹ コピー取り寄せに際して、総合地球環境学研究所の図書係松田さん、田中さん、そして長田科研担当の紀平朋さんには大変の世話になった。名をあげて感謝したい。

ギリシア語を教え始めたことはまちがいない。菊池家が江戸時代から続く豪商であり、南画のコレクションで有名だったことはすでに触れた。そうした家柄の人が随分と乱暴な江戸弁を話すのは「何とも不調和であり、わたしも下賤の言葉をいくらか知つてゐたので、先生のはどうもつけ焼刃のやうでをかしかつた」と田中美知太郎は感じていた。

菊池の教え方について、田中はこう述べている。

この新米先生は、ギリシア語を教へるのもこれが最初だらうから、ときどき行きづまつたり、間違つたりする。それでも平然としてゐて、別にごかましたりはしない。先輩の助手クラスの人たちは、「あの人のあやしげなギリシア語は習ふ気がしない」などと、遠慮のない批評をしてゐた。しかしわたしは間違つたりしても、正規の教科書があり、すぐそれがわかるのだから、別にギリシア語を習ふ邪魔にはならないと思ひ、とにかく与へられた唯一の機会を利用することにして、一回も休まずに授業を受けた。そして二学期の半ばからはプラトンの「ソクラテスの弁明」を読んでもらつた。

近づき難いやうなよく出来る先生よりも、親しみやすく熱心な先生の方が、わたしにはよかつたわけだ。先生の間違ひを見張りながら、用心して勉強するというのも、かへつて効果的だといふことになる。(田中 1984:163-164)

菊池の性格がよく出ている。教え子たちを威圧するのではなく、親しみやすく接する態度は長田夏樹に対してもそうだったに違いない。田中は菊池と仲良くなると、家にまで誘われ、コーヒーをごちそうになったという。なお、ここで教科書が出てくるが、雑誌『芸文』に文学部の講義題目と教科書が掲載されているが、ギリシア語の菊池講師が使う教科書として、**White, First Greek Book** という英語の教科書が指定されている。

田中によると、菊池に習った人たちの名前を以下にあげている。

長沢信寿、高田三郎、岡田正三、鹿野治助など、その方面で知られてみる名前は、いずれも京大の菊池慧一郎から手ほどきを受けたことになる。講師として教へたのは九年間であつて、その間に多くの人たちがギリシア語を習ったことになる。(田中 1984:165)

この田中の回想には間違いがある。正式な『京都帝国大学文学部三十周年史』をみるかぎりにおいては、京大の在籍期間は9年ではなく、8年である。ただし、後述するように、菊池自身も『オリジナリティー』の中で、9年間と述べている。

ここに出てくる人々はすべて有名な哲学者だ。ウィキペディアやコトバンクなどから紹介しておこう。ただし、鹿野治助はこちらでまとめた。

長沢信寿(1897-1972) 真言宗京都大学(種智院大学)、龍谷大学、京都帝国大学などを経て、昭和23年九州大学教授となり、35年退官。第一薬科大学教授、大阪大学、立命館大学各講師を歴任した。また西日本哲学学会委員長、日本宗教学会、日本西洋古典学会、中世哲学学会各役員を務めた。著書に「プラトン」「古典と反省」などがある。日本学士院賞を1961年に受賞している。

高田三郎(1902-1994)は、日本の西洋哲学史(中世)研究者、京都大学名誉教授。1927年京都帝国大学文学部哲学科(西洋古代中世哲学専攻)卒業。1927年に創設された京大哲学哲学史研究第五講座

(古代中世哲学史) から分割される形で 1947 年に開講した第六講座 (中世哲学史) のスタッフとして京大に招聘され 1966 年退官まで務めた。任期中にスコラ哲学を中心とした研究を行い、アリストテレスの翻訳やトマスの『神学大全』の翻訳を行い、日本における中世哲学史研究の水準を大きく高めた。橘女子大学初代学長 (1967 - 1974)。

岡田正三 (1902-1980) は、ギリシア哲学などの研究者、神戸大学教授。戦前から漢文古典に関する著書を著し、戦後夕刊京都新聞編集責任者、のち神戸大学教授を務めた。『プラトン全集』(全国書房) の翻訳などを手掛けた。

鹿野治助(1901-1991) はストア哲学の研究者として名高く、プラトーン著作集(弘文堂) での翻訳もある。エピクトーテス『人生談義』上・下は鹿野の訳書として、現在でも岩波文庫で読める。

この四人の中の一人、岡田が竹之内静雄に、菊池のことをこう語っている。

いまは故き岡田正三先生から、私はつぎのような話をきいたことがある。

「菊池さんはくへラス会>というものをつくって、学年のはじめに、ギリシア語習う学生を募集した。古代ギリシア人は、自分たちのことをへラスと呼んでいたから。

ものずきがけっこういて、はじめには何十人という学生が集まってきた。やりはじめると、ギリシア語は、むつかしく、きびしくやられるから、学生はだんだん減って、学年末には、ほんの数人になってしまった。なるほどへらす会だ、と笑ったものだ。

そのかわり、残った数人の仲間は、必死になって、ギリシア語にとりくんだ。

菊池さんはまだ三十前だった。江戸時代からの豪商のあとつぎだとかで、色の白い坊ちゃんだったが、ギリシア語には、非常な情熱を注ぎこんでいた。貧しく熱心な学生には、自費で、辞書を買ってやったりもする。

夏休みなど、菊池さんの自宅に集まって、講読をやった。暑くなってくると、みんな、すっぱだかになり、パンツ一つで、それぞれ自分が調べてきたことを土台に、激論を戦わせたものだった。

みんなむちゅうになって、ギリシア語を勉強した。」竹之内静雄(1986:203)

へラス会が「減らす」会とは、菊池自身が飛ばしそうなブラックジョークである。「暑くなってくると、みんな、すっぱだかになり、パンツ一つで」とあるが、家にエアコンがなかった時代、父夏樹も夏の間はパンツ一枚で机に向かっていたことが思い出される。あるいは、菊池私塾の伝統を受け継いでいたのかもしれない。

こうした熱心だが、かなりハードな菊池の授業についていけない人もいたようだ。その一人が京都学派四天王の一人、高山岩男(1905-1993)である。

私はプラトンをギリシア語で読みたかったので、一年のとき菊池慧一郎さんのへラス会に入って御指導を受けた。この会には高田三郎、岡田正三、草場弘、田中美知太郎等々、後にギリシア、ラテンの専門家となる諸君がいたのであるが、文法さえまだ一通り終わっていないのに一週三晩プラトンを四、五頁読む強行軍なので、毎日の時間はほとんどギリシア語のために消費する有様となり、私にはまことに苦痛であった。というのは、プラトンも読みたいが、ヘーゲルの『精神現象学』に魅了され、『華嚴五教章』その他華嚴哲学に魂を奪われていた私には、ギリシア語にばかり時間を費やすことは、

とても許されなかったからである。そのためヘラス会からは一年間で脱落し、二年のとき波多野先生のプラトン講読に出るようになった。(高山 1995:30-31)

菊池の授業の具体的な様子がこの高山の言葉からうかがえる。「文法さえまだ一通り終わっていないのに一週三晩プラトンを四、五頁読む」のはかなりハードだったに違いない。ギリシア語の学習だけに時間を浪費されていると感じても致し方ない。

菊池のヘラス会における指導はとても熱く、ハードなものだったことはこれら回想から読み取れる。自分が実際この会で勉強するかどうかと問われると素直に「はい」とは言えないものの、その熱気と情熱は素晴らしいものだったのではなかろうか。

現在、菊池慧一郎を取り上げる哲学者はほとんどいない。インターネットで唯一引っかかった論文がある。それは現代のプラトン研究の第一人者である納富信留東京大学教授の「西田幾多郎と田中美知太郎」で、そこには菊池はこう述べられている。

ギリシア語の講読は、主に若い講師で影響力の強かった菊池慧一郎から習っている。(納富 2016:8)

注(16) ケーベルの弟子であった専門家の田中秀央が海外に出ていたため、慶應義塾出身で鹿子木員信の弟子であった菊池が教えていた。強い個性で反発を買ったこの変わり者について、田中は決して悪く言っていない。(納富 2016:30)

注(23)ちなみに、田中が京大でギリシア語を学んだ菊池慧一郎は自著に『オリジナリティー』(古今書院、一九四〇年)という表題をつけているが、それは屈折した自負を込めたものであり、田中の標的ではなかろう。

この部分だけを読むと、納富の菊池への評価は決して高くはない。「強い個性で反発を買ったこの変わり者」とは具体的に何を指すのかは記されていないが、田中美知太郎が悪く言っていないことは上でみたとおりである。注(23)の『オリジナリティー』についていえば、「小品は古今書院の吾が友人によつて切に上梓を慫慂され、而も『オリジナリティー』と云ふ素晴らしい名称をすら贈られた」と表紙裏に記されているにもかかわらず、勝手に「屈折した自負を込めたもの」と述べているのは、明らかに『オリジナリティー』を読まずして書いたものである。いかがなものか。菊池ほど「屈折」とは無縁で、まっすぐに生きた人はいない。小論を書きながら、その思いを強くした。

菊池慧一郎は、後に「京都学派」と呼ばれるようになる哲学科の学生にギリシア語を叩き込んだ人である。まごうことなき事実として、もっと顕彰されていいと思うのだが、いかがであろうか。

4. 大日本回教協会

大日本回教協会は昭和 13(1938)年 9 月 19 日に発足し、第二次世界大戦の終戦とともに、昭和 20(1945)年 10 月に解散した。

初代会長は元首相で陸軍大将だった林銑十郎で、アジアの回教徒対策や文化工作、回教の調査研究をおこなった。軍部をバックにしたイスラム教国との連携を模索する政治団体である。1939年2月には、イスラム文化協会を吸収して協会調査部が発足すると、協会の機関誌である月刊『回教世界』が1939年4月から1941年の第三巻12号まで発行されている。

その大日本回教協会の資料が早稲田大学に寄贈されている。また、その資料については、店田廣文を代表者にした科学研究費による調査研究が行われ、その報告書が出ている(以下店田 2005)。その店田(2005)にはかなり詳細な大日本回教協会の活動が記されている。『回教世界』に掲載された記事や論文が執筆者とともに一覧表としてあげられている。上であげた菊池慧一郎の「韋駄天アラビア語」などの情報はこれによる。

店田(2005)には、一年ごとの活動報告が掲載されており、大日本回教協会の昭和 14 年業務報告によると、以下が記されている(店田 2005:14-15)。菊池慧一郎と関連しそうな部分を抜粋して紹介する。

- 昭和 14 年 2 月 イスラム文化協会を当協会に吸収
- 4 月以来 機関誌『回教世界』を発刊
- 8 月 アラビア語講習会の開講準備 (10 月より開講決定)

続いて、昭和 15 年の業務報告を関連箇所を紹介する(店田 2005:15-16)。

- 昭和 15 年 4 月 アラビア語教科書の作成(協会のアラビア語講習会および大阪外国語学校の教科書)
- 同 7 月 アラビア語辞書を 150 部輸入し、アラビア語講習会および大阪外国語学校で使用
- 同 10 月 新聞作成のため、アラビア語活字を作成

長田夏樹がアラビア語講習会を受講したのは昭和 15 年のことだ。前年の 10 月から第一回の講習会が開設され、夏樹が受けたのは第二回だったことがわかる。

この報告書には、大日本回教協会寄託資料(イスラム文庫) 整理済み資料がついていて、それを丁寧に見ていくと関連資料が散見される。以下に抜粋しておく(店田 2005 : 28, 30-32)。

- 112 大日本回教協会 大日本回教協会アラビア語講習会申込書 昭和 14 年 9 月
- 113 アラビア語講習会受講者名簿 昭和 15 年ごろ
- 114 各種語学講習会聴講者名簿 年代記載なし 馬來語・アラビヤ語・梵語 申込書
- 150 大日本回教協会所蔵 大日本回教協会所蔵アラビア語図書目録 昭和 18 年 7 月現在
- 160 アラビア語講習会趣旨及規定 昭和 14 年 8 月
- 163 菊池慧一郎 韋駄天アラビア語 昭和 15 年至 16 年 綴 附ヘブライ語突破 文法解説
- 165 アラビア語教材 一綴
- 166 アラビア語分詞変化表
- 167 アラビア語ノート原稿及資料 一袋
- 168 アラビア語ノート 一袋
- 169 ペルシア語ノート 一袋
- 170 マレー語ノート 一袋
- 171 トルコ語ノート 一袋
- 172 英語略語集 英文

- 173 「自由の声」紙論評アラビア文記事原稿
- 174 トルコ文書簡 一袋
- 175 パンジャブ語資料(新聞) 二束一袋
- 176 ウルドゥー語資料
- 177 本 アラビア語用ペン先見本

ここに並べた言語関係の資料はいずれも菊池慧一郎が関連するものと思われる。年譜にあげられた言語以外ではパンジャブ語の新聞があるが、これが菊池のものかどうかは実際に見ないことにははっきりしない。「113 アラビア語講習会受講者名簿」か「114 各種語学講習会聴講者名簿」あたりには、長田夏樹の名前があるのかもしれない。

長田夏樹が保管していた「菊池書類」には、昭和 17(1942)年 9 月からの大日本回教協会主催による「回教圏語学講座」として、アラビア語講習の申込書と梵語の申込書が残っている。どちらも講師は菊池慧一郎先生とある。同時に開催される語学講座で、月曜と木曜がアラビア語、水曜と金曜が梵語で三か月で講了とある。病氣療養中であるはずの菊池は1週間で二日間はアラビア語を、別の二日間は梵語を教えるという驚異的なスケジュールである。ヘラス会を想起させるほどだ。なお、夏樹はこの9月に華北交通に入社したため、この講習会は受講していない。

科研報告書に戻ろう。店田(2015)にはもう一つ大日本回教協会関係写真資料目録が掲載されている。ここに、菊池慧一郎の写真が5枚あげられている(店田 2005:75-76)。

- 515 大日本回教協会関係者の会合(三) (菊池慧一(郎)外四名)
- 517 大日本回教協会関係者の会合(五) (菊池慧一郎外四名)
- 518 大日本回教協会関係者の会合(六) (菊池慧一郎外四名)
- 519 大日本回教協会関係者の会合(七) (菊池慧一郎外四名)
- 520 大日本回教協会関係者の会合(八) (菊池慧一郎外四名)

この大日本回教協会関係者の会合の写真として、他に掲載されているのが会長だった四天王延孝や大村健太郎といった大物なので、菊池慧一郎の大日本回教協会での地位の高さがうかがえる。

コロナ禍にあつて、早稲田大学の資料を調べることは出来ないが、コロナが明けて、機会があれば、この大日本回教協会寄託資料を調べてみたいと思う。

5. 韋駄天アラビア語

「韋駄天」とはインドの神の名前に由来し、足の速い人を例えていう語彙である。したがって、「韋駄天アラビア語」とは、「速習アラビア語」ないしは「スピードラーニング アラビア語」にあたると思われる。『回教世界』誌にて、連載を始めるにあたって、菊池は以下のように述べている。かなり長くなるが、ここに引用しておく。

青年が新しい言葉を征服せんと志す場合、人に順に教へ込まれるのを拱手待つてゐる中学生であつてはならない。一体此言葉はどんな表現法をするのか。名詞はどんな形か。動詞は、等々気の向いた

時、気の向いた所を開き、気の向いただけ読んでみる。そして対象の概念を掴んでかかることが大切である。文法は地面である。よく繰り返し読み、事に当つては参照することを怠つてはならない。字母順など、開いて見た時は口で辿つて見る。併し無理に覚える必要はない。本を閉じたら忘れてしまうに限る。併し時々玩具にし、時には書いて見たりしてみると自然親しみが出来る。正確に順が頭に這入るのは、其順の必要な辞書を引く時まであづけて置いて何の不都合もない訳である。万事其流儀で巧みに横着にして而も眼口手の活動には勤勉であることを要する。兎に角文法は座右に置き、之に親しむ様にする。無意識の幼児が語学の最大天才である事実を含味し、心理的に熟せしむる様、決して理解一本押しであつてはならない。頭のよい人程自己の才智に背負投を喰ふのは、みてゐても滑稽である。猶文法と云ふものは学習の終了した時に整理されて頭に持たれた抽象的知識なので、夫によつて学ばるべきものではあるが、夫を学んだ所で仕方がないし、又夫を片づけてから実地に向はうなどとすると複雑多岐で目を廻はす様なことになる。地面を手にして実際に歩きまわる。其骨で愛用してほしいものである。私の此手記は参考に便なる様、又頭にすつぽり這入よ様苦心されてゐるので、開いた左右二頁を以て一単位としてある。其苦心の跡をよく味つて呉れると、一層此文法が使ひよくなることであらう。(『回教世界』第2巻4号, 1940年4月, p.1)

ここには、いくつもの言語をものにした菊池の言語を学ぶ姿勢がうかがえる。

中学生のように、一方的に受け身で勉強するのではなく、自分から「気の向いた時、気の向いた所を開き、気の向いただけ読」むことを勧め、「文法は地面である」とは含蓄のある至言である。実際に学習するにあたっては「巧みに横着にして而も眼口手の活動には勤勉であることを要する」と、無理はしない程度に、音読や書き写しを厭わないことの大切さを説く。「無意識の幼児が語学の最大天才」であり、「理解一本押しであつてはならず」、「頭のよい人程自己の才智に背負投を喰ふ」と独特の比喩表現で、頭でっかちにならないことを諭す。「地面を手にして実際に歩きまわる」ことを推奨する菊池の言葉を、二十歳の長田夏樹は胸に刻み込み、その後、中国ではそれを実践したことになる。

この「韋駄天アラビア語」を終えるにあたって、菊池は次のように記している。

○韋駄天アラビア語も其名に反してスローモーであつた。併し其実際的結果は其名に叛かず韋駄天であつたのだ。多忙なる社界生活に帰宅後復習することの殆ど無い人々が一週一回の出席によつて兎に角三ヶ月には不完全な辞書をたよりに多少の指導を以て千夜一夜の無点文が読める域にまで達した。此実績は全世界を訪ねても何所にも発見できない高速度であつて、そこに韋駄天の名は儼として動かすべからざる権威を以て立つてゐる。(『回教世界』第2巻12号, 1940年12月, p.122)

「韋駄天」といいながらも、ゆっくりであつたと自戒の言葉を述べた後、「一週一回の出席」で「兎に角三ヶ月」で「千夜一夜の無点文が読める域にまで達した」ことは、「全世界を訪ねても何所にも発見できない高速度」だと自画自賛している。

これに続いて、今後の方針をこう述べている。

○今後の方針—此雑誌の後部は韋駄天子の独壇場として提供され、私は夫を極度に活用すべき義務があるとすら思つてゐる。そこで私が手掛け而も清書の出来た亜文購読は多少に拘らず掲載してゆく

こと勿論であるが、初等講義も改作して再録する、全部書きおろしで、序講を加へ今迄の講義程度に進み得る前置き、例へば先づ字母の読み方から詳細に説明すると云つた道をとつてゆく。若し夫が一応自分に満足のゆくものであつたら一冊にまとめて世に贈る段取をとらう、併し猶不満であつたら更に第三編輯をも刊行する決心である。(『回教世界』第2巻 12号, 1940年 12月, p. 122)

この連載でアラビア語学習が終わるのではなく、「亜文購読は多少に拘らず掲載」し「初等講義も改作して再録」し、「一冊にまとめて世に贈る」ことを予告している。また、これに続いて、次なる目標として、ユダヤ語講義(現在ではヘブライ語と呼ばれている。実際、菊池の連載タイトルは「ヘブライ語突破」となっている)をあげて、こう述べている。

○ユダヤ語講義—アラビア語を今迄程度に学習し終つた者に他のセム族語は簡単至極に落手する、而も夫を学ぶことによつて一層アラビア語の知識、アラブ文化の認識が深まるのは当然であり必至であり必然である。故に今度は韋駄天ユダヤ語講義が出現せねばならない。新年号から連載すべく努力しよう。

(中略)

アラビア語とユダヤ語との比較学習、夫は必ずや相互に得る所多大なる期待を与へる。更にアラブ文化は交易文化、隊商文化、東より西へ、西より東へと古代文化を輸出入しつゝ繁栄したのである。其上其文化の特に学問的基礎はアレキサンドル大王の快挙による希臘文化のシリア氾濫であつた。夫なくして大文法家、大法制家等は出生し得なかつたし、夫あるが為によく中世ヨーロッパの暗黒を近世文化へと転出せしめ得たのである。夫を思ふ時真のアラビア文化の認識は希臘文化、梵文化、ペリシヤ文化、スペイン文化等々の研究をも要求する。何でも必要なものは片づけてしまへ。茲に此雑誌は夫等一切にまで亘る必然性と可能性をもつてゐる。協会のつづれぬ限り、私の死なぬ限り、而して書く紙の切れざる限り(但し是は甚だ心細い)、此部分アルラーの恩寵を楽しむことであらう。

(『回教世界』第2巻 12号, 1940年 12月, p. 123)

すでに述べたように、この「韋駄天アラビア語」の連載のあと、菊池は「ヘブライ語突破」を一度だけ掲載している。また、同じ「セム語族」(現在はアフロアジア語族と呼ぶ)に属し、アラビア語とユダヤ語の学習は連続的であることを強調している。

そして、ここには菊池の研究対象が壮大であることが記されている。その範囲は「ユダヤ語」だけにとどまらず、「真のアラビア文化の認識は希臘文化、梵文化、ペリシヤ文化、スペイン文化等々の研究」まで視野にいれたものであったことが提示されている。最後には、「協会のつづれぬ限り、私の死なぬ限り、而して書く紙の切れざる限り(但し是は甚だ心細い)」、菊池による語学案内が続くことを宣言している。

しかし、菊池は『回教世界』に「千一夜解説講評」を執筆しただけで、「ユダヤ語突破」の連載も、またアラビア語に関する本も執筆することはなかった。戦争によるものなのか、病気によるものなのか、よくわからない。やる気満々の情熱あふれる言葉と裏腹に、「アルラーの恩寵を楽しむこと」もなく、日本で初めてとなるはずだったアラビア語文法書も、一切かなわなかった。菊池の人生はあまりにも短かった。

6. 独習ラテン語初歩

菊池慧一郎には「韋駄天」と名付けた語学書がある。

それが『独習ラテン語初歩』¹⁰だ。タイトルには独習とあるが、「序」の前には『韋駄天ラテン語初歩』と書かれている。これが菊池が考えたタイトルだったのであろう。確かに、江戸っ子の末裔だった菊池には、「韋駄天」を語学書に冠することは洒落た趣向だったのであろうが、当時の良識ある知識人にとって、日常卑俗に使われる「韋駄天」を語学書のタイトルに使用するには抵抗感が強かったと思われる。したがって、出版社として、「韋駄天」という名前を採用したくなかったことは容易に推測できる。ここで、「韋駄天」が採用されていたとするならば、韋駄天シリーズというのが出版されていたかもしれない。

その序で、菊池はこう述べる。

著者は此冬九大法学部の学生諸君の為にラテン語の初歩を教へなければならなくなつた。その当時教科書をとゞのへることができなかつたのも一動機であるが、既に少くとも一外国語には相当通じ、其上第二語学を修めてゐる人々に、与へられたる短時日で兎に角一通りの初歩知識を供給し、新学期には講読演習を以てラテン語の実世界の征服に向はしむる最善の方法を考察した結果、大体次の如き講義案が作り出されたのである。勿論此著は多少其取材を変更し、且つ殆ど二倍にはなちてゐるが。そこで我々の目的は極めて明かである。即ち其は短兵急にローマの城塞に肉迫し、其一角を崩して占領の第一歩を印することである。而して占領してしまへば後は、勿論努力次第であるが、何でも自由に見物することができるであらう。従つて普通の初等書のように実際のローマ攻撃を数年後に約束する、勿論甚だ確実ではあるが、永陣の計画にとどまる方法を棄てゝゐる。然らば如何なる方法を以てしてゐるのであるか。なるべく段階を追ひ、適當なる表現を含める例文を掲示し、其に必要な変化の諸形態を説明しつゝ、文法的講読をして行くだけのことである。併し其文法講義は著者独特のものであつて、必ずや初学者に最も敏活なる読破力を与へるに相違ない；他面此書は全く所謂練習題を欠いてゐる。なる程其が有るにまさることはない。併し自分の経験から言つても、初学者は講読を受けて復習しつゝ、片つぱしから読み倒し、語脈や表現法等に慣れをつけてしまう方が、単語と単語とを合わせながら例題をもちいるよりも、遙に有効なのである。而して若し練習題を所望する篤志家があるならば、此講義を中頃までも手に入れゝば、普通の初等書の例題くらいは相当容易に片付け得る。従つて我々が貴重なる時間を之に費す義務はないであらう。(菊池 1930:i)

この本が九州大学での講義に間に合わなかったことの穴埋めに計画されたという。すでにみたように、九州大学には昭和 5(1930)年と 6(1931)年に教えに行っているので、昭和 6 年の講義にはこの本が使われたのかもしれない。

菊池は独特のたとえをよくする。ここでは、「短兵急にローマの城塞に肉迫し、其一角を崩して占領の第一歩を印することである。而して占領してしまへば後は、勿論努力次第であるが、何でも自由に見物することができるであらう」と述べ、ラテン語学習をローマの城塞にたとえている。また、普通の初等

¹⁰ 小論とは全く関係ないが、筆者の母方の祖父、神宮徳寿は昭和 2(1926)年に『独習羅典語の研究』(郁文堂書店)を上梓している。この時期には独習というのが流行っていたのかもしれない。

書はかなりの年月をかけ練習題を解きながら、ラテン語をマスターすることを目指しているが、彼の「韋駄天」は練習題もなく、そのまま講読ができることを目指す。このやり方はアラビア語でも実践されている。3か月で本が読めるようになるというのはすごいことである。

この『独習ラテン語初歩』が実際にラテン語の学習に使われていた。佐藤幸市郎「上原ゼミナール第一期生の記録」¹¹によると、一橋大学の有名な歴史家、上原専禄はこの教科書を使っていた。また、菊池の妹が嫁いだ相手が後の一橋大学教授町田實英である。その町田が一橋大学を退官するときに掲載された「町田実英法学博士—その人と学問—」のなかに、菊池が登場する。

戦争末期、生きとし生ける若者すべてが招集されたとき、長男、秀春君も勤労働員先の北海道の北端から令状を持って上京した。しかし八月十五日終戦を迎えて、秀春君の無事を知り、疎開先から逢いに行くその矢先、突如、別な悲しむべき災難が起こった。それは次男秀臣君(当時五歳)が折から暴走してきたトラックの車輪の下敷きで、目のあたり、生命が奪われたのである。…(中略)…

続いて義兄京都大学古典語講師菊池慧一郎氏の訃報が齎らされては自暴自棄の気持もおこる。因みに菊池氏はさきの羅馬法関係羅句語試訳のラテン訳その他につき先生に助言を与えなどして力になって来ていた人である。(吉永栄助 1963 : 307-308)

この記述から、菊池が亡くなったのは8月15日終戦直後の1945年だったことがわかる。いずれにせよ、一橋大学との関係が深い。

一見、ギリシア・ラテンの古典語を教えるプラトン学者とアラビア語とは全くつながらない。しかし、言語習得ということでは、つながっていることが『独習ラテン語初歩』から読み取ることができよう。

7. オリジナリティー

小論の最後に、菊池慧一郎の一書『オリジナリティー』を取り上げる。

本書を上梓した5年後に、菊池は亡くなっている。すでにみたように、菊池慧一郎の生涯は断片的な記述しかない。それは本書を読んでいないからである。つまり、本書には、彼の生涯がかなり克明に記されている。知られざる学者の一生を知るために、本書をたどってみよう。

この本の構成は二部に分かれ、前半は「魂哲学」と題し、「動物的人間の形成」「大和魂の独創性」「私の長尾」の三編からなり、後半は「プラトン学」と称して、「ソクラテス観」「プラトン徳論私断」「宗教的目的論と其止揚」の三編からなる。「大和魂の独創性」以外は、すべて発表済みだという。前半の「動物的人間の形成」は雑誌『形成』のために書いたもので、「私の長尾」は『暮雪集 長尾雄治君遺文と追憶』に掲載されたものである。後半の「プラトン学」に掲載された三編は、菊池慧一郎の業績としてすでに紹介した。『哲学研究』に掲載した論文や『朝永博士還暦記念哲学論文集』に掲載された論文がそれにあたる。

自伝的な記述がみられるのは「私の長尾」だ。ここに出てくる「長尾」とは、長尾雄治のことである。大谷編『暮雪集』によると、長尾は明治36(1903)年大阪に生まれ、大阪高校から大正14(1924)年京大哲学科に入学し、昭和4(1929)年に大学院に進学した。学業成績優秀なため授業料免除の特典を受けたほ

¹¹ <https://jfn.josuikai.net/nendokai/dec-club/hatou2/naiyou/satouk.htm>(2021年2月27日確認)

どであった。しかし、肺結核のため、サナトリウム生活が長くなり、昭和14(1939)年3月、遂に帰らぬ人となってしまった。この『暮雪集』に掲載されたのが「私の長尾」である。基本的には長尾雄治の妹に宛てた、長尾への追悼文となっているが、菊池自身の生涯をも振り返っている。

中学卒業までは「何をしても人には及ばないと云ふ殆ど自分を見限つた生活の中に全く愚昧な怠け者同様の経路を辿つて生長した」(120頁)が、向軍治と出会って、ドイツ語に目覚め、それが後のギリシア語教師の端緒となったという。

向軍治とはどういう人なのか。コトバンクにこうある。

独逸学協会学校に入学後、宣教師シュピナーの影響で受洗。一時は宣教師を志すが、のち断念し、明治22年東京農村学校のドイツ語教師となる。28年慶応義塾講師に転じ、のち教授に就任。退任後は関西大学で教鞭を執った。一方、三並良とともに普及福音教会を設立。その後、日本ゆにてりあん弘道会に入り、理事などを歴任。また、神田乃武らとともにローマ字運動を展開し、39年ローマ字ひろめ会を設立した。反戦思想を説き、たびたび筆禍・舌禍事件を起こした。

菊池も「あの異相無類、張子の虎の様な面魂が暗示する様に、どこか尋常でない所があつたに相違ない」(120頁)として、「全く其教へ方は変わつてみた、第一我々について一度も訳読をさせたことがな」(120頁)く、しかし、「其一回量を一日に復習し切るには、夫こそ便所に行く間もなかつた」(121頁)という。「此語学猛訓練が後年ヘラス会を組織する遠因」(122頁)となった。

こうして慶応理財科に入った菊池は、「茲に令名嘖々たりし美青年教授鹿子木員信先生」(122頁)の下で学び、「寝ても覚めても向先生が一転寝ても覚めても鹿子木先生」(123頁)となった。ここで、この鹿子木員信について、みておこう。デジタル版日本人名事典によると、以下の通り。

1884—1949 大正-昭和時代の思想家。海軍中尉で退役して哲学を専攻。慶応義塾、九州帝大の教授を歴任。昭和16年ナチス・ドイツにまねかれて皇国学を講義した。17年大日本言論報国会の専務理事兼事務局長。戦後、公職追放処分となる。昭和24年12月23日死去。66歳。東京出身。海軍機関学校卒。著作に「皇国学大綱」など。

第二次世界大戦中の国粹主義的言動がクローズアップされがちだが、プラトン研究で学位を取っている。慶応ではスピノザ、カント、ヒュームなどを講義していた。

鹿子木に心酔しているながら、その距離感は微妙なものがあつたようで、「自分は愚鈍である」のに、「俊才として私を待つ鹿子木先生からの離脱」(124頁)をすることを決意し、慶応哲学科本科一年で去り、京大哲学科選科に入りなおす。そして「今度こそ本当に寝ても覚めてもプラトン」(131頁)といった状態になる。ここまで本書を読む限り、最初の経歴でみた慶応卒ではなく、途中で京大哲学科に転学していたことになる。

その当時の京大の哲学科は錚々たる講師陣がいた。菊池も「全く当時の京大は壯観であつた、正の西田に副の朝永、其諧調の美しさ、而も後れて新進気鋭の田辺加はつて、三曲合奏は正に哲学的至大の交響学、忽ち最盛期を招集したのに何の不思議もない」(131-132頁)と述べている。これらの哲学者たちの説明は不要だろう。

西田幾多郎は「あれは鹿子木の弟子でプラトン狂だ、あれで面白い、放つて置けと云ふ意向」(131頁)であった。田辺元とは「丁度先生が京大へ見えた当初約三か月程私は下鴨に同居を楽しむ機会を得」(132頁)で、個人的に談笑し、講義にも参列し、その感想を「素晴らしい劇を見てゐる様だ」(132頁)と言ったところ、田辺が吹き出した、そんなエピソードも披露している。また、田辺には「菊池君は自分独りで享樂してゐて發表しない」(135頁)と言われ、この時期に論文を書かない人という定評がついてしまったようである。

すでにみたように、菊池は京大でギリシア語を教えていた。それについて、菊池は「幸私は誰の直弟子でもなかった、其為に哲学科としてではなく、新村教授が仮に養子分となし、言語学科の末席たる希語を担当せしめられた」(142頁)と述べている。九大での教科書として、『独習(韋駄天) ラテン語初歩』を書き、京大でも言語学科の末席に連ねていたのだから、真の言語学者というべきなのかもしれない。

菊池は京都での生活を謳歌していたように思うが、なぜ京大を去ることになったのだろうか。その理由を述べた個所を本書から引用しておこう。

私は三十七で満九年間の京大教職を去つた、其表面上の理由は如何にも錯綜してみたかの如くに見える、併し是も先慮の先慮でしかなかつた、先慮は京大四年の修学を予科として私を本当の大学プラトンのアカデーメアに叩込み、其塾頭を命じて修行せしめた、そして漸く三十七の春卒業を許した訳である。私は此卒業を記念すべく鼻下に粗髯をつけることにした、そして曰つた、もうプラトンの希語教育はやらぬと。実に私のプラトン教室は、長尾を心から見返へしたあの記念すべき時を以て、其時の演習書ポリティコス篇最後の文句通り、最も美事に完了して、解消したのである。先慮は私のまだ余熱の冷めぬ狂侠を陶冶すべく倒れかゝた女子商業の引受けと再建を命じ、私を実世間の渦中に投入、具に其如何なるものかを体験せしめたのである。(菊池 1940:145)

冒頭に「私は三十七で満九年間の京大教職を去つた」とある。すでに指摘したように、『京都帝国大学文学部三十周年史』には、大正 13(1924)年 6 月から昭和 6(1931)年 3 月までとあるから、満 7 年間である。佐々木徹(1986:8)によると、「また、哲学科の同窓としては、西谷先生より先に、務台理作(大正七年卒業)、浜田与助(大正八年)、三宅剛一(同)、三木清(大正九年)、菊池慧一郎(大正十一年)、谷川徹三(同)、日高第四郎(同)、木村素衛(大正十二年)、高坂正顕(同)」とあるので、大学卒業から京大に講師として採用されるまで二年間のギャップがある。これはあくまでも推測でしかないが、正式採用される前から、ギリシア語を教えていたのかもしれない。菊池ご本人も、田中美知太郎も 8 年というのには何か事情があるに違いない。

上の引用に戻ろう。凡人がこれを読んでも、京大を去る理由はよくわからない。「私は此卒業を記念すべく鼻下に粗髯をつけることにした」と述べているが、1940 年ごろの写真を見ると、確かに口髯がみえる。京大を去った後、「倒れかゝた女子商業の引受けと再建」とあるが、これが浅草女子商業学校の校長職をさすのだろう。そして、「学校は勿論急速度の膨張発展を遂げた」(146頁)という。

東京に戻ってきてからについて、菊池はこう述べている。

併し先慮は私から両親を奪ひ、私には大患を下し、其間世相を自由に転変せしめ、私を完全に仙居の醞釀期へと導いて呉れた。私は茲に病を養ひつゝ静かに今迄の収穫を魂に消化、一方梵語を片づけ

て印度文化霊と交感しつゝ、西語に亜語に文化植民地を開設、言霊の幸を楽しみながら、白紙化の度を弥々加へ、遂に今日に至つて新なる転換期に逢着してしまつた、貴女の兄さんが其導師であつたのである。私の魂の自叙伝は茲に終る、貴女¹²は兄さんの先生を十分に窺知し得たことゝ思ふ。(146頁)

ここに書かれていることは両親の死と自分の病である。そんな中においても、サンスクリット語に、スペイン語(菊池文書にはスペイン語に線が引かれてあつたが、間違いなくスペイン語も学習したことになる)、そしてアラビア語を学習したという。強靱な精神というしかない。ここまで「私の魂の自叙伝」をたどってきたが、冒頭でみた経歴よりは幾分か詳しくなつたのではなからうか。

この『オリジナリティー』が刊行された後に、長田夏樹は菊池宅に通うようになる。年譜にはこう記されている。

1941年10月 毎週、菊池慧一郎先生宅の家塾に通うようになる。ドイツ語を学び、ギリシア語とラテン語の手ほどきをして頂く。

「もうプラトンの希語教育はやらぬ」と宣言した菊池であつたが、語学としてのギリシア語を教えることは厭わなかつたのだらう。

8. おわりに

菊池文書には、梵語(サンスクリット)の初歩が書かれたものが残されている。梵字母表から始まって、デーヴァナーガリー文字の結字など、文字の説明が4枚とサンスクリット・テキストであるパンチャタントラが筆記された3頁が残されている。実際パンチャタントラをやつたことがあると父から聞かされていたので、父が学習した時のものなのだらう。ただし、大日本回教協会の梵語講習会で配られたものなのか、菊池から個人的に頂いたものかはわからない。

また、第1講と書かれた紙が4枚あり、それぞれこう書かれている。

(1) 第1講 DERYAYA GIDEN BALIĞIN HIKÂYESI

(2) 第1講 SENENIN MEVSIMLERI

(3) 第1講 ISLÂM DINI

(4) 第1講 (アラビア文字がある) §Aと§Bがあり、そこに「馬來語にとつて漢語たる梵亜の名詞は好んで副詞等の他品詞に用ゐられる」という1節がみられる。

(1)(2)(3)はトルコ語、(4)はアラビア文字で書かれたマレー語である。これらは紙片しか残されていないので、全体像はわからないが、第1講があれば、第2講と続いていたと想定できる。これ以外に、ヘブライ文字の一文とアラビア文字の一文があるが、残念ながら筆者は読めない。

「菊池文書」のなかで一番わからないのが、「V1 初」と書かれた、きれいに清書された原稿である。30字×12行の縦書きの原稿用紙に書かれていて、内容的には『オリジナリティー』のなかの「私の

¹² 上で述べたように、この「私の長尾」は長尾雄治の妹に向けられて書いた形になっているので、「貴女」が登場する。

長尾」によく似ているが、出版されたものとは若干違う。「初」とあるので、初校だったことがわかるが、これがなぜ夏樹の手元にあったのか、その理由を知る由もない。

小論は知られざる言語学者として菊池慧一郎について述べた。これまで慶応卒だと思われていたが、実は京大哲学科選科を卒業している。「ヘラス会」という名のギリシア語勉強会を開き、そのヘラス会からは多数の「京都学派」の哲学者を輩出している。しかし、菊池の功績はほとんど顧みられることはなかった。ギリシア語以外に、ドイツ語、ラテン語、アラビア語、梵語、トルコ語、マレー語などを教えていた、典型的なポリグロットである。

小論を書くにあたって、菊池の様々の文章を読んできた。哲学的文章はもうひとつピンとこない。ありていに言えばよくわからない。それとは対極にある、わかりやすい譬えも登場する。そんな中で、筆者が一番気に入った菊池の言葉がある。それは筆者が知る、生前最後の著述にあるのだが、それをここに引用して小論を締めくくりたい。この文章は俊才に向けられたものなのだが、「馬鹿は馬鹿なりの道を歩むより外はない」とある。弁証法よろしく、ジンテーゼを導き出せるとは到底思わないが、これを胸に秘めて日本言語学史外伝を書き続けたい。

乞食を三日するとやめられぬと云ふが、さて乞食にならうとすると容易にはなれない様に、馬鹿になり切ると云ふことは天下の難事らしい。・・・(中略)・・・馬鹿になる第一条件は自分以外の人が皆自分より偉いと本当に心から思ひ得る様になることだ。勿論そこに世人の利口と自分の馬鹿と截然たる区別が立つから、如何に彼等が偉くとも其真似はしない。其は馬鹿の自殺に等しい。馬鹿は馬鹿なりの道を歩むより外はないのであるが、兎に角人が皆偉く見えることが馬鹿の第一条件たるに変わりない。・・・(中略)・・・弁証法を欠く俊才病！其を早く抜け出して呉れ。(『回教世界』第3巻4号、28頁、1941年)

参考文献

Shinobu Iwamura (岩村忍) with the collaboration of Natsuki Osada and the late Tadashi Yamasaki(1961) *The Zirni Manuscript: A Persian-Mongolian Glossary and Grammar*. Kyoto University.

梅棹忠夫(1956)『モゴール族探検記』岩波新書。

大谷卓造(編)(1940)『暮雪集：長尾雄治君・遺文と追憶』以玉堂。

菊池慧一郎(1930)『独習ラテン語初歩』刀江書院

菊池慧一郎(1940a)『オリヂナリティー』古今書院

菊池慧一郎(1940b)「韋駄天アラビア語」『回教世界』2(4):1-15; 2(5):15-22, 1-16; 2(6):16-30, 1-7; 2(7):23-30; 2(8):31-45; 2(12):1-29.

菊池慧一郎(1941a)「ヘブライ語突破」『回教世界』3(1):1-7

菊池慧一郎(1941b)「千一夜講読講評」『回教世界』3(2), 3(4)

京都帝国大学文学部(1935)『京都帝国大学文学部三十周年史』内外出版。

高山岩男(1995)『京都哲学の回想—旧師旧友の追憶とわが思索の軌跡』燈影舎。

佐々木徹(1986)『西谷啓治: その思索への道標』法蔵館。

柴田隆行(2001)「日本の哲学教育史 (上)」『井上円了センター年報』

下田章平(2014)「菊池惺堂とその家系」『中国近現代文化研究』15:28-50.

下田章平(2018)『『菊池惺堂日記』第三冊(昭和五年四月-昭和六年五月)』『相模女子大学紀要』82:27-44

下田章平(2019a)『『菊池惺堂日記』第一冊(昭和二年十一月～昭和三年一二月)』『書法漢學研究』24:

下田章平(2019b)『『菊池惺堂日記』第二冊(昭和四年一月-昭和五年三月)』『中国近現代文化研究』20:79-105

下田章平(2019c)『『菊池惺堂日記』第四冊(昭和六年五月-昭和七年一〇月)』『相模国文』46:46-76

下田章平(2019d)「昭和初期における菊池惺堂の収蔵ネットワークー大橋廉堂先生入蜀画会を中心としてー」『書学書道史研究』29:73-87.

竹之内静雄(1986)「田中美知太郎」丸谷才一編『言論は日本を動かす』講談社。185-220 頁。

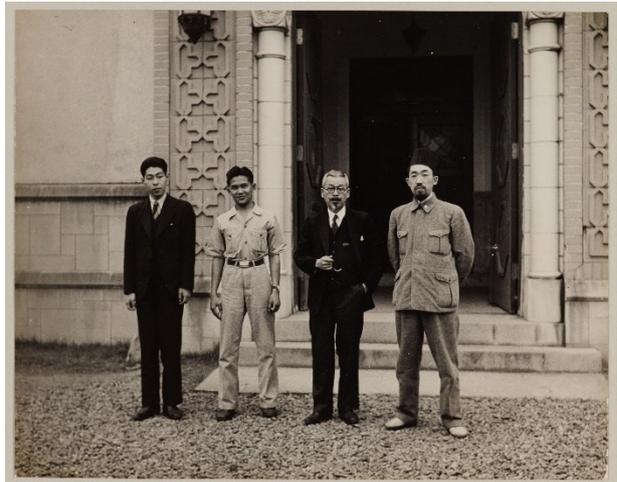
田中美知太郎(1984)『時代と私』文藝春秋社。

店田廣文(2005)『平成 15 年度～平成 16 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2)成果報告書: 戦中期日本におけるイスラーム研究の成果と評価ー早稲田大学「イスラム文庫」の分析』

納富信留(2016)「西田幾多郎と田中美知太郎 --日本哲学とギリシア哲学の協働のために--」『日本哲学史研究』13:1-32

吉永栄助(1963)「法学博士町田實英先生ーその人と学問ー」『一橋論叢』49(3):295-308

資料 (大日本回教協会会合 菊池慧一郎氏ほか。右は東京回教礼拝堂前とある)



(髭の男性が菊池慧一郎氏。写真は以下のサイトの資料 ID748(左) と ID752(右)をダウンロードした)
https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/ga_Islam/Islam_bunko_list.pdf